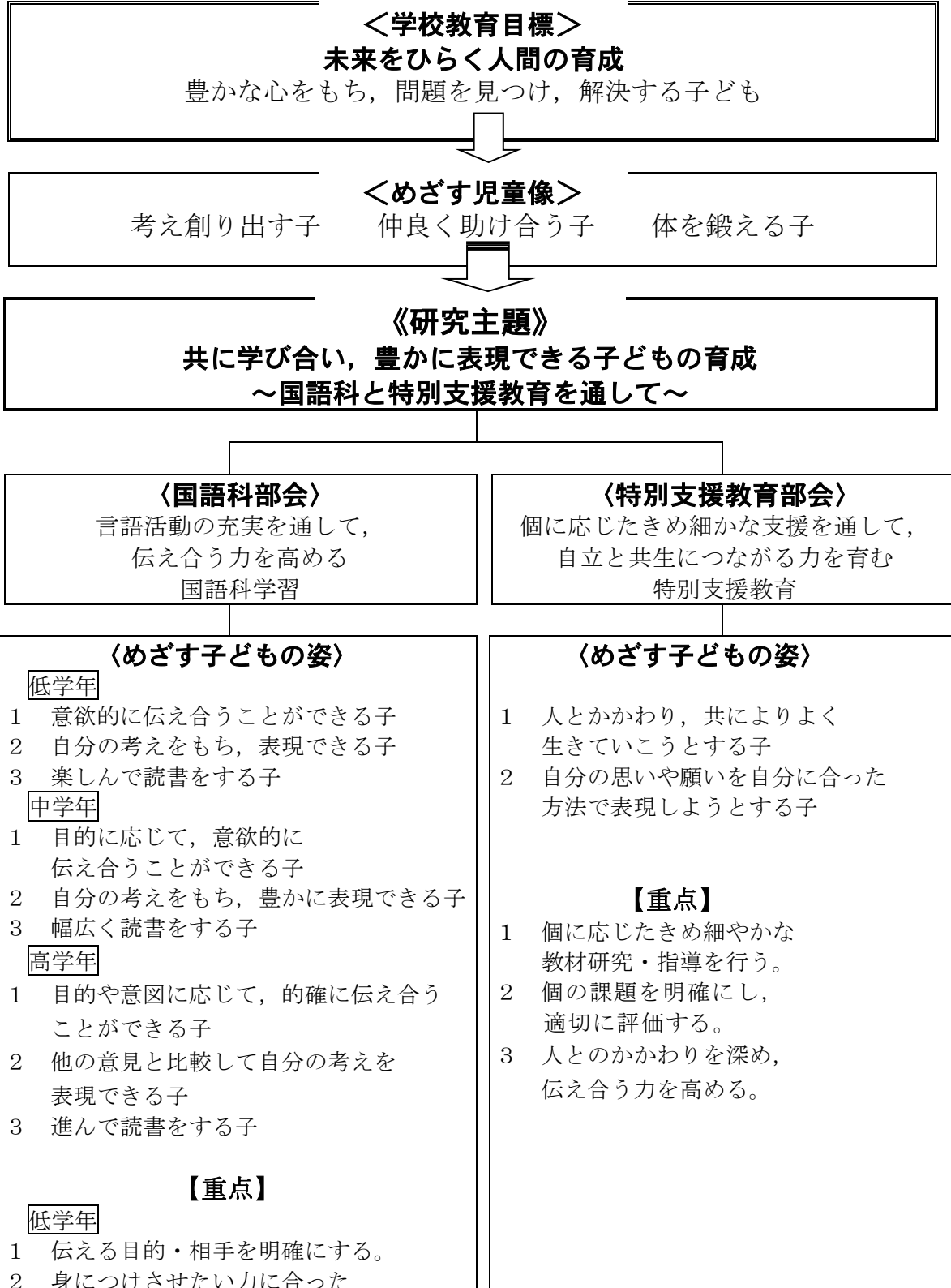


# 令和4年度 研究計画

## 研究の概要（国語科・特別支援教育）

### 1 研究全体構造図



<p>言語活動を工夫する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>3 ふり返る場面を設定する。</li> <li>4 言語環境を整えることで、 語彙を豊かにする。</li> </ol> <p><b>中学年</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 伝える目的・相手を明確にする。</li> <li>2 身につけさせたい力に合った 言語活動を工夫する。</li> <li>3 ふり返る場面を設定する。</li> <li>4 言語環境を整えることで、 語彙を豊かにする。</li> </ol> <p><b>高学年</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 伝える目的・相手を明確にする。</li> <li>2 交流，推敲する場の設定をする。</li> <li>3 ふり返る場面を設定する。</li> <li>4 言語環境を整えることで、 語彙を豊かにする。</li> </ol>	
---	--

## 2 研究主題について

子どもたちを取り巻く社会においては、高度に情報化が進み、多くの情報が発信されている。子どもたちは瞬時に必要な情報を受信し、幅広い知識を得ることができるものの、その情報をいかに使いこなすかという能力が問われている。その一方で、以前に比べて人間関係は希薄になり、他者とのコミュニケーションの取り方にも変化がみられ、情報機器の活用や短い言葉による会話など、互いを深く理解し合おうという意識も希薄になってきているように思われる。

また、令和3年度の全国学力・学習状況調査において、目的や意図に応じて、理由を明確にしながらか、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること、目的に応じて、文章と図表とを結び付けて必要な情報を見付けること、目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること、などに課題があると示されている。

本校研究主題の「共に学び合う子ども」とは、他者と考えを出し合い、協働したり新たな考えを創造したりしながら、課題の解決に向けてより広く深く考える子どものことである。協働したり新たな考えを創造したりするためには、他者と課題を共有し役割を分担して課題をよりよく解決しようとする態度が必要である。また、自分と異なる見方や考え方のよさを認め、互いの理解を深め、尊重することも大切である。さらに、他者の思いや考えに触れて自分の思いや考えが深まり、自信をもつことができれば、それらを伝えようとする意欲の向上にもつながっていくものと考えている。

本校は、交流の場として、同学年・異学年だけでなく、特別支援学級が身近にあり、様々な人々と共に助け合い、支え合って生きていくことを学ぶ上で恵まれた環境にある。

「豊かに表現できる子ども」とは、自分の伝えたい事柄や考え・思いなどを、目的や場面あるいは相手に応じて的確に話したり書いたりすることができる子どものことである。また、身振りや手振り、顔の表情なども含めて考えている。様々な学習や体験活動において、思考・判断したことを的確に表現するような活動を意図的・計画的に取り入れ、豊かに表現する力を育てていきたいと考える。また、思考・判断したことを表現する際、目的や相手などに応じて表現方法を工夫したり、用いる言葉を適切に選んだりして、いかにわかりやすく伝えるかを考えることが、その表現をより豊かにすることにつながると考える。

こうした「共に学び合い、豊かに表現できる子ども」について、今年度も引き続き、国語科教育及び特別支援教育を通して、具現化に向けた研究を推進していきたい。

### 3 本年度の各部会の研究について

#### (1) 国語科

#### 「言語活動の充実を通して、伝え合う力を高める国語科学習」

##### ①主題について

平成28年の中央教育審議会答申において、「思考力・判断力・表現力等の育成を効果的に図るため、引き続き、記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動の充実を図ることが必要である。」とある。加えて、「これからの子供たちには、創造的・論理的思考を高めるために、「思考力・判断力・表現力等」の「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」がこれまで以上に必要とされるとともに、自分の感情をコントロールすることにつながる「感情や想像を言葉にする力」や、他者との協働につながる「言葉を通じて伝え合う力」など、三つの側面の力がバランスよく育成されることが必要である。」とある。

この内容を受け、国語科の主題を設定し、次のように考えている。

##### 『言語活動の充実』について・・・

本校では、言語活動で身につけた言語能力を統合し、言語を自分で活用できる「言語活動を重視した授業」をめざしている。

平成28年の中央教育審議会答申においても、「国語科においては、こうした学習活動は言葉による記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を通じて行われる必要がある。したがって、国語科で育成を目指す資質・能力の向上を図るためには、資質・能力が働く一連の学習過程をスパイラルに繰り返すとともに、一つ一つの学習活動において資質・能力の育成に応じた言語活動を充実することが重要である。」と示されていることから、特に次の3点について留意している。

- 1 「身につけさせたい力」を明確にする。
- 2 「身につけさせたい力」に合った言語活動を選定する。
- 3 三次で児童が主体的に取り組めるように、二次の活動を位置付ける。

「言語活動」が活動だけに終わらないようにするためには、「確かな学力」をつける活動になっているか、選定した言語活動が果たして適切であるのか、言語活動の特徴を見極めることが必要である。そのために言語活動について教師が実際に取り組み、教材研究を充分に行うことを重視している。そうすることで、ポイントや改善点が明らかになり、児童の実態にあったきめ細やかな支援に役立てることができると考えている。

「言語活動の充実」を重視した授業により、①身につけた力を可視化できる。②教科書で学んだ力を自力で活用できるか評価できる。③並行読書をする中で、教科書で紹介→自分の選んだ本で紹介のくり返しの中で確実な指導と評価を推進できる、と考えている。

##### 『伝え合う力を高める』について・・・

「伝え合う力」とは、学習指導要領解説（平成29年告示）において、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力」と示されている。本校においても、相手の思いや考えを聞いて理解し、自分の思いや考えを深め、言葉を適切に用いて表現する力と考える。思いや考えをもつことは、表現したいと思う原動力となる。自分の伝えたい思いを明確にするために、目的意識や相手意識をもたせて、「やってみたい」という意欲を高めたり、「できそうだ」という見通しを明確にしたりすることが大切である。

留意点は、次の3点である。

- 1 相手の思いや考えを正確に理解し、自分の思いや考えを深める。
- 2 適切に伝えることができるよう、多様な表現方法を工夫する。
- 3 語彙量を増やす。

そして、平成28年の中央教育審議会答申で「国語科が、中心的役割を担いながら他教科等と連携して言語能力の向上を図るとともに、国語科が育成する資質・能力が各教科等において育成する資質・能

力の育成にも資することがカリキュラム・マネジメントの観点からも重要である」と述べられているように、国語科で身につけた力が、他教科へ転移していくよう意識し、主題に迫っていきたい。

## ① 国語科重点について

### 低学年

- 1 伝える目的・相手を明確にする。
- 2 身につけさせたい力に合った言語活動を工夫する。
- 3 ふり返る場面を設定する。
- 4 言語環境を整えることで、語彙を豊かにする。

### 中学年

- 1 伝える目的・相手を明確にする。
- 2 身につけさせたい力に合った言語活動を工夫する。
- 3 ふり返る場面を設定する。
- 4 言語環境を整えることで、語彙を豊かにする。

### 高学年

- 1 伝える目的・相手を明確にする。
- 2 交流，推敲する場の設定をする。
- 3 ふり返る場面を設定する。
- 4 言語環境を整えることで、語彙を豊かにする。

### 【重点1】

伝える目的意識・相手意識の明確化

### 【重点2】

伝え合う力を高めるための言語活動の工夫

### 【重点3】

自己をふり返る場面の設定

### 【重点4】

語彙を豊かにする指導の改善・充実

## 【重点1】伝える目的意識・相手意識を明確化

国語科の研究主題にある「伝え合う力を高める」ためには、何よりも、表現したいという思いが大切である。目的（何のために）や相手（誰に）を明確にすることで、児童の表現したい思いがふくらみ、児童が主体的に取り組むことができる。そのことにより、下学年のめざす子どもの姿にある「意欲的に伝え合うこと」ができるのではないかと考えた。また、伝える相手が、友達か、下級生か、保護者なのか等によって、同じことを伝えるにも表現の仕方が異なる。上学年では、相手によって表現の仕方を工夫し、相手にあった的確な表現のできる子をめざしている。

### 「重点1」に迫るための具体的な手立て

- 1 単元の導入では、教師が単元のゴールとしての見本を示し、児童が目的意識や相手意識をもって学習に取り組めるようにする。
- 2 単元の導入で、単元全体の学習計画を明確にし（実態に応じて児童と共に作る）、単元全体の見通しをもたせる。

## 【重点2】「伝え合う力を高める」ための言語活動の工夫

教材文で習得した知識や技能を活用して、書く・話す・発表する等の活動を行うことで、児童は主体的に取り組むことができ、思考力・判断力・表現力が磨かれていく。書く・話す・発表する等の活動は、読み取ったことを書いたり、発表したりする等、2領域が連動して行うことも多い。

## 「重点2」に迫るための具体的な手立て

- 1 語彙量を増やし、多様な表現方法を習得させる。
- 2 交流の場を設定し、伝え合う視点を明確にする。

「言語活動」での表現方法例

「話す」活動・・・音読劇，ポスターセッション，プレゼンテーション，ディベート  
タブレットのプレゼンテーションソフトの活用，本の紹介 等

「書く」活動・・・創作話，続き話，紹介カード，クイズブック，ポップ，ポスター，  
本の帯作り，図鑑，紙芝居，巻物，リーフレット，パンフレット  
フライヤー（映画の広告紙），図書館を使った調べる学習コンクール 等

## 【重点3】自己をふり返る場面の設定

### 「重点3」に迫るための具体的な手立て

- 1 毎時間，毎単元，ふり返りの場面を設定する。
- 2 児童の発達段階に沿った，ふり返りの方法を工夫する。

児童自らが，自分の学びや変容を見取り，自分の学びを自覚することができるようになることが，次の学習への意欲や，他教科への転移につながる。そのため，毎時間ふり返りの時間を確保し，さらに，単元の最後にも全体を通したふり返りを設定する。児童の発達段階によって，挙手，記号，短文で等，様々な方法を工夫して取り組む。

〈実践例〉

- 知 知らなかったことに気づく。知っていたことに肉付けする。
- 技 できなかったことができるようになる。できていたことが磨かれる。
- 思 課題の解決に向けて，思考する（悩む・苦しむ・生み出す等）。
- 判 何が適切か，どれを選択するかを判断する。
- 表 自分の思いを相手に表現する。 →話し手としての表現力  
相手の思いを引き出すために表現する。 →聞き手としての表現力
- 人 学ぶことが楽しい。もっと学びたい。もっと考えたい。

## 【重点4】語彙を豊かにする指導の改善・充実

### 「重点4」に迫るための具体的な手立て

- 1 語句の量を増やし，語句のまとまりや関係，構成や変化について理解し，多様な表現方法を習得させるための資料を掲示する。
- 2 単元の関連図書を整備し，並行読書の充実を図る。

語彙量を増やすために「気持ちを表す言葉」や「感想の言葉」，作文の書き方を習得させるための資料を掲示し，活用出来るようにしている。

また，学校司書との連携により，単元の関連図書を整備している。教材文で学んだことをきっかけに，関連した本を自ら手にしたり，同じ作者の本を読んだりする児童をめざしている。そのために教室や廊下など身近に図書を用意し，興味関心がもてるようにしている。

## (2) 特別支援教育

### 「個に応じたきめ細かな支援を通して、 自立と共生につながる力を育む特別支援教育」

#### ① 主題について

インクルーシブ教育システムを構築するために、最も本質的な視点として、「それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか」とされており、障害のある子どもに対し、自立と社会参加を見据え、その時々で的確に答える指導を提供することが大切だと言われている。本校においても、障害をもつ児童の自立をめざすことに加えて、障害をもつ児童と通常の学級の児童の交流及び共同学習はますます重点的に取り組むべき課題となっている。

特別支援学級での学習では、異年齢集団であることの良さを生かして、学級の中でのペア学習や互いの役割を果たすことを通して自己肯定感を高めることを基本としている。また、通常の学級の児童と、日常生活や行事、授業時間などを通して直接交流をもったり、学級便りや自己紹介カードなどを通して間接的に交流を深めたりしている。また、特別支援学級に通う児童にとって、一人一人に合わせた課題に向き合う時間はとても大切であり、重点的に取り組むべき内容である。しかし、交流及び共同学習を進める上で、集団の中で人と関わり合う力は必須であり、それは個人で課題に向き合うだけでは、解決されない問題である。本研究の中で、実態差がなくなるようにグループ編成をし、それぞれの実態に合わせた課題の中から、「共に学び合う」姿、「人との関わりを深める」力について積極的に追究していきたいと考えている。研究の中で学んだ知識、経験を、普段の学校生活に生かしていけたらよいと思っている。

通級指導教室での学習では、基本の指導形態は個別指導になるが、指導者との間で他者との基本的なやり取りの力を高めることによって、それぞれの学校、学級に戻った時に少し大きな集団の中でも力を発揮してよりよい関係を広げることが目標にしている。また、グループ指導の中でそれぞれの良さを生かしたり、苦手な点を補強したりする SST（ソーシャルスキルトレーニング）を取り入れたりすることによって、効果的に「人との関わりを深める」力を身につけていくことができるようにしている。

#### ② 特別支援教育重点について

特別支援教育の部会では、障害の種類や程度にかかわらず、人と関わり合いを大切にしながら豊かに自己表現、自己実現をする力を伸ばしてほしいという願いをもって研究を進めている。ただし、その実現のための手立ては一人ひとりの障害の種類や程度、教育的ニーズの違いによって異なってくる。例えば「豊かに表現できる子ども」に関していえば、子どもの状態によって、「表現」の仕方は、音声や文章に限らず、動作や歌声、表情など、より幅広くきめ細かくとらえていく必要があると思われる。そこで特別支援教育部会では、指導の重点を以下のように定めてより適切な支援をめざしたいと考えている。

#### 【重点1】個に応じたきめ細かな教材研究・指導を行う。

重点1の「個に応じたきめ細かな教材研究・指導を行う」は、特別支援教育ならではの重点である。個の教育的ニーズ、それぞれの子どもの思いや願いを実現していけるような教材、手立ての工夫が大切である。そしてそのための手立てとして、イメージマップの活用や学級訪問の際の集団の中での行動観察を大切にしていきたい。

#### 【重点2】個の課題を明確にし、適切に評価する。

次に、重点2の「個の課題を明確にし、適切に評価する」では、集団・グループの指導であっても、

個別指導であっても、それぞれの子どもの課題を明確にして指導し、評価していくことが大切であると考えている。そうしたプロセスがまた次の指導につながっていくのである。また、特別支援教育では、個別指導計画の有効活用も大切な課題である。その際、結果だけでなく形成的評価を重視し、自己肯定感を高めることを意識していく必要がある。さらに、自己評価や子ども同士の相互評価など多様な評価の形を授業の中で活用していくことが大切である。

### **【重点3】人とのかかわりを深め、伝え合う力を高める。**

最後に重点3の「人とのかかわりを深め、伝え合う力を高める」である。伝え合う学習は、伝えたい内容に対する「感動」、それを伝えたい「対象」、伝えるための「技能」、自信をもって表現しようという「意欲」、そして「互いへの関心や社会性」のどれが欠けても成立しない活動であると考えている。さらに表現の力は理解の力と表裏一体であることを重視して学習していくことが大切である。その点で、重点3は重点1、2とも密接に関連していると思われる。表現の力は、個人差の大きい分野であるが、多様な表現方法や個人内での変容をとらえ、適切な支援の方法など個別指導計画に基づいてとらえていきたい。